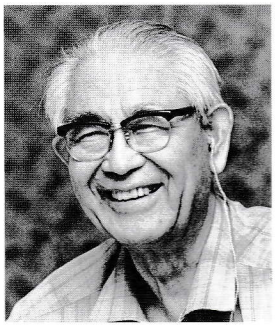

鳥 35 (2/3) 1986 年より転載

7 代会頭　古賀忠道　KOGA Tadamichi

1903（明治 36）－1986（昭和 61）．会頭在任期間 1975－81

唐沢孝一（都市鳥研究会）

1903 年佐賀県に生まれる．25 年東京帝国大学農学部獣医学科に入学．獣医学科に進んだ理由を古賀（1950）は「（高等学校の末期ころ）私は動物と一緒に暮して人間社会からはなるべく遠ざかりたいと思った」と記している．同時に「しかし，実際は決して動物だけを相手にすることはできない」「人間社会の根本はやはり人である」とも述べ，動物園を通して市民と触れ合い，野生動物や自然保護と関わってきた半生を述懐している．28（昭和 3）年大学を卒業し東京市・上野恩賜公園動物園（当時）に勤務．2.26 事件のあった 36 年 7 月にクロヒョウ脱出事件が発生し，管理上動物園に園長職が必要となり初代園長に就任．41（昭和 16）年に応招，軍獣医として台湾やベトナムに赴き，42 年 12 月より陸軍獣医学校教官（軍鳩・軍犬学）．終戦の 45 年に上野動物園園長に復帰．動物園開設 80 周年（1962）に引退するまで動物園の顔として広く国民に親しまれてきた．

古賀の研究業績について黒田（1986）は，「哺乳類から入られ鹿の角の研究の後，ツルの動物園繁殖の道を開いて学位を得られた」と記している．研究対象は哺乳類，鳥類，ハ虫類など動物園での飼育動物全般にわたる．獣医としての日々の実践を通して多くの業績を残した．古賀等の飼育技術の高さの一例として中川（1986）は，「ツルの補卵性を利用した人工孵化による増殖法は“Koga-method”として世界的に高く評価」「アメリカシロヅルの繁殖に応用された」と紹介している．古賀の視線は動物園の檻の中に留まることなく，常に動物たちの故郷である世界の自然に向けられていた．『自然と野生動物』（古賀 1969）には，「珍しい動物を捕獲して動物園で展示することが，もともと少ない動物を絶滅に追い込む」「動物園がシフゾウやヨーロッパ野牛の絶滅を救った」「戦争や人口増による自然破壊」「野生動物の生きる権利」など，今日的課題を取り上げている．動物園の役割の一つとして希少動物の飼育・繁殖技術の向上，野生復帰を早くから意識していた．著書に『動物と動物園』（角川書店），『動物園夜話』（雪華社），『動物園と自然保護』（インパルス）など多数．詳細は「著作一覧」（1988）を参照されたし．

1976 年に 6 代黒田会頭の後を引き継ぎ会頭に就任，6 年後に 8 代黒田会頭にバトンタッチした．その間の事情は森岡（2009）に記されている．本会会頭に推挙された古賀は当時 72 歳．園長を退職した後も，幾多の要職を兼ね多忙の中にあった．が，本来が大柄で頑健，大学時代は体格のよさを見込まれ野球，テニス，ボート，サッカー等に引っ張りだされたほどであり，健康には恵まれていた．本会の幹事会や大会，評議員会等々には欠かさず出席した．ただし，学会運営の大半は副会頭（森岡）や幹事（竹下・唐沢・樋口・川内・福田・他）に一任．九州男児らしいおおらかな性格であった．古賀について黒田（1986）は「昭和 50 年，新たな気運が台頭していた日本鳥学会は新会頭に古賀さんを推し，6 年間，古賀会頭の許で若々しいスタッフが生気に充ちて，学会を建て直した」「大会の懇親会でも若い幹部を相手に二次会を共にされ，椅子に凭れて一時の睡眠をとられると，また杯を重ねられた」と，その人柄を評している．当時の幹事会は東大農学部樋口研究室で行っていたが，その帰路文京区弥生坂に面した古賀宅にお邪魔し談笑を楽しむことしばしばであった．

戦後の「空気銃対策」「霞網問題」「狩猟法改正」等の会議では日鳥連山階会長や野鳥の会中西会長と連携，野鳥保護に尽力した（黒田 1986）．（財）東京動物園協会理事長，国際自然保護連合（IUCN）日本委員会委員長などを務め，WWF 日本委員会の設立に努めた．1982 年，世界の野生動物及び自然保護に多大の貢献のあった人に贈られる「ゴールデンアーク勲章」を授与される．世界の動物保護に尽し，その巨体をもって本会の発展を支えた．